

[学術論文／論文の種類]

大学生を対象とした身の回りの音の捉えに関する探索的研究 —音日記の実践と自由記述の分析を中心に—

An Exploratory Study of University Students' Perception of Sounds Around Them: Focusing on the Practice of Sound Diaries and an Analysis of Free Descriptions

二宮 貴之
Takayuki Ninomiya

1. 研究背景と目的
 - 1.1 問題の背景
 - 1.2 先行研究の検討
 - 1.3 研究目的
2. 研究方法
 - 2.1 基本情報
 - 2.2 手続き
 - 2.3 倫理
3. 研究結果
 - 3.1 音の記録シートのクラスター分析
 - 3.2 日ごとに見る音の記載量
 - 3.3 自由記述の抽出語
 - 3.4 自由記述の語に関する共起ネットワーク
 - 3.5 自由記述の高出現語に関する記述
4. 総合考察

要旨 本研究は、幼児教育や初等教育に携わる者を養成する大学では音楽技術を身に付けることに意識が向きがちで、「音を聞く」ことに焦点が当たっているとは言い難い、という問題意識を起点に、マリー・シェーファーが提唱するサウンド・エデュケーションの教育アプローチを参考に、大学生を対象とした音日記の実践とその後の自由記述の分析を行った。結果は、階層的クラスターでは生活音に関する記載が多く見られた一方、合唱や集団行動を伴う音については見られなかった。日ごとの音の数については毎日約3音の音を記載していた。KH Coderによる共起ネットワークでは、「音」の語を中心に「聞く」「意識」「気づく」の語が強く結びついていた。総合的に見ると、音日記の実践により大学生は音に意識が向きやすくなる。保育者・教育者を目指すために音への感受性を高める良い耳を育て聞き方を学ぶための有用な教育方法であった。また、先行研究には見られないコロナ禍のデータを計量テキスト分析しており希少性がある。

キーワード：サウンド・エデュケーション¹，音日記²，テキストマイニング³，音楽教育⁴

1. 研究背景と目的

1) 問題の背景

豊かな感性や創造性を養うために音楽教育が果たす役割は大きい。保育所や幼稚園では、器楽、歌唱、リズム運動など多様な音楽表現が日常の保育の中で行われている。この音楽表現は、保育者の豊かな感性、創造性、音楽技術を土台にして活動が展開されている。

保育者自身が美しい音楽や音に心を動かされることで、美的な感覚が養われ、子供たちに音楽表現を実践する際に役立つ。そのため、日常的に音に意識を向けることは幼児教育や初等教育に携わる大学生にとっても重要である。

また、保育者は音楽理論を理解し、歌唱、楽器演奏、ピアノ演奏が行える音楽技術を身に付けることで、幼児の器楽、歌唱、リズム運動などにおいて質の高い指導が行える。このような音楽表現の活動の中で子供と保育者の両者に共通している重要な点は、音を聞くということである（本論では「聞く」という表記に統一する）。この「聞く」行為は、音楽表現を行う上で非常に重要な要素であるが、幼児教育や初等教育に携わる者を養成する大学では音楽技術を身に付けることに意識が向きがちで、「音を聞く」ことに焦点が当たっているとは言い難いのではないだろうか。

幼児教育や初等教育に携わる者を養成する大学の講義では読譜力や演奏スキルの習得が重視されているにも関わらず、学生は「音」をよく聞いていないという実態が見受けられる。吉永（2009）は大学生を対象とした調査の中で『『聞くこと』は、音楽表現の根幹を担うものでありながら、多くの学生は『聞いているつもり』というのが実態である』と指摘している¹⁾。

幼稚園教育要領解説（2018）第2章ねらい及び内容では「自然の中にある音、形、色などに気付き、それにじっと聞き入ったり、しばらく眺めたりすることがある、幼児はその対象に心を動かされていたり、様々にイメージを広げたりしていることが多い」と記されている²⁾。つまり、幼児は自然音に触れる中で創造力を用いていると捉えることができる。小学校学習指導要領解説【音楽編】（2017）第2章音楽科の目標では「表現及び鑑賞の活動を通して……生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と記されている³⁾。つまり、音楽科の授業においても、生活や社会の中にある音に着目した学びも必要と捉えることができる。

このように、幼児教育及び初等教育において身の回りの音に関する学びは重要とされている。「生活の音」、「身の回りの音」を共感しあったり、一緒にそれを聞いたことを言語化したりするためには、保育者や小学校教員の導きや言葉かけが必要である。そのためには、保育者/教育者を目指す者が日頃の生活の中にある音に目を向けることを通して、子供の気づきを促すことが求められる。

この身の回りの音に着目した音楽教育のアプローチには、レーモンド・マリー・シェーファー（R. Murray Schafer, 1933-2021、以下シェーファー）^(注1)が提唱する、サウンドスケープ^(注2)の思想や

その教育版にあたるサウンド・エデュケーションが挙げられる。このサウンド・エデュケーションの教育アプローチは、幼児教育のあらゆる場面で活用できる。例えば、日常の保育において、子供であっても大人であっても、園舎か屋外かに関わらず、身の回りの音としての水や風の音、虫や鳥の鳴き声に注目する活動を通して、微細な音色や音量に気づくことができるようになり、音に対する感受性が高まることが期待される。

2) 先行研究の検討

シェーファーは、音楽教育の中で音そのものが着目される切っ掛けとなった書籍『教室の扉』（1980）⁴⁾、音を聞く、考え、創るなどを中心とした主に指導者向けの100個の課題集である『サウンド・エデュケーション』（1992）⁵⁾、10歳から12歳程度の子供向けの100個の課題集である『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション』（1996）⁶⁾を出版している。これらの書籍はサウンド・エデュケーションの研究の中では「オリジナル」として位置づけられている。

サウンド・エデュケーションに関する先行研究としては、大学生を対象とした実践研究（e.g. 吉永, 2012 ; 岡本ほか, 2014 ; 二宮, 2018 ;）^{7) 8) 9)}、小学校の総合学習における実践研究（土田, 2009）¹⁰⁾、特別支援学校において知的に障がいがある生徒を対象とした実践報告（小枝, 2016）¹¹⁾、など教育に関連したものが確認できる。

これまでの先行研究では、シェーファーが執筆した『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション』に記載されたイヤートレーニングの課題を様々な対象者に実施したもので、実践の成功可否に重点が置かれている。

また、イヤートレーニングの実践を通して調査協力者が意識的に音を聞くようになることはすでに明らかにされている。しかし、サウンド・エデュケーションの実践を通して大学生がどのような音をどのように捉えているのかに関する量的・質的な分析報告はまだ少ない。これらの分析の一部は恣意的な判断基準で分類されていることもあり、一貫した評価を得ることが難しい状況である。

3) 研究目的

本研究の目的は、大学生が音日記を実践することによって、彼らがどのような音をどのように捉えているのかを探索的に調査することである。

2. 研究方法

本調査を進めるにあたる調査概要、手続き、倫理事項は次の通りである。

1) 基本情報

調査協力者

大学生 20名（男性 5名、女性 15名、平均年齢 21 歳）。

調査時期

2022 年 1 月 6 日（木）から同年 1 月 13 日（木）まで。

・音日記の実践は 2022 年 1 月 6 日（木）から 1 月 12 日（水）まで。

- ・質問紙調査は2022年1月13日（木）に実施した。

音日記

音日記^(注3)の実践は、7日間実施した。調査協力者には普段通り生活してもらい、一日の最後に学修ポータルサイト webclass 上に掲載した音の記録シートのフォーマットにその日気づいた身の回りの音を無制限で記録してもらった。音の記録シートには7日間で408音が記録されていた。

質問項目

「身の回りの音を聞く実践を通して感じたことを自由に記述して下さい」という問いに対し自由記述で回答を求めた。

質問項目は、学修ポータルサイト Webclass に掲載し回答してもらった。

アンケート回収率は100%、n=20である。

2) 手続き

調査協力者には7日間普段通りの生活を送るよう伝え、毎日一日の終わりに、気づいた音、聞こえた音を音の記録シートに記述して欲しいことを伝えた。また、調査協力者がどのように音を記述したら良いか分からない場合に備え、「今日聞いた中でお気に入りの音○○」などと記載しても良いことを音の記録シートの冒頭箇所に説明書きした。記載する音の数や種類についての指示や制限はしていない。

2022年1月6日（木）から1月12日（水）までの期間で身の回りで聞こえた音を毎日記述してもらい、音の記述が終了した翌日1月13日（木）に、質問紙調査を実施した。

3) 倫理事項

身の周りの音に関する本調査は、まず、研究協力機関に依頼書・同意書を口頭説明し署名をもらい、研究協力の許可を得た。その後、個人に向けて依頼書・同意書について口頭説明し研究協力への同意を得た。加えて、対象者が大学生であるため、成績などには一切影響がない旨を伝えている。最終的に機関及び個人の依頼・同意書が揃った後、調査を開始した。本研究の実施においては、「サウンド・エデュケーションに関する研究」のテーマで名古屋市立大学の倫理委員会から2021年12月28日付で承認を得ている（ID番号21017）。

3. 研究結果

結果については、まず、調査協力者の気づいた音を全体的に把握するために、KH Coderを使用してクラスター分析を行った。次に、日ごとに変化すると思われる音の数について検討した。そして、音の種類の特徴をグループ化して検討するためにKH Coderを使用して自由記述の出現回数と語をカウントし、語の共起ネットワークを作成した。最後に、高出現回数の語について検討するために、その語に対応する記述データを照らし合わせ、大学生の身の回りの音の捉え方について検討した。

1) 音の記録シートのクラスター分析

樋口（2014）は KH Coder による分析に関して、「計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である」と述べている¹²⁾。この KH Coder は、社会学、教育学、医学、看護学などの多方面で活用されており、2019 年時点で KH Coder を使用した論文・研究発表は 3,000 件を超えている。音の記録シートから得られたテキストデータを量的に整理し、質的に解釈するため、KH Coder を用いて分析した。

音の記録シートに記載された記述データの前処理では、総抽出語数（使用）：2,424（1,106）、異なり語数（使用）：646（566）であった。「音」「聞こえる」という語は必然的に多く出現するため、使用しない語に指定している。強制抽出する語の指定は「風」を入力した。調査協力者がどのような音に気づいたのか、について全体的な傾向を把握するために階層的クラスター分析を行った。集計単位と抽出語の選択は、最小出現数 6、最小文書数 1 とした。抽出語の階層的クラスター分析の併合水準表を参照して 17 のクラスターが生成された（表 1）。表 1 には、クラスターの種類に加えて、記述内容が伝わるよう複数記述を紙面の都合上 2 つと少数記述を掲載した。少数記述は該当しない箇所がある場合、空欄にしている。

番号 1、クラスター名「打つ キーボード パソコン」では、パソコンのキーボードに関する音について複数の記述があった。調査協力者が所属する大学ではパソコンが必携化されている。レポート課題などもパソコンから文字入力する機会があるため、キーボード音に関する音が複数記述されていた。少数の記述では「ペグでトンカチを打つ音」があり、テントを張る時に出る音と想定される日常的にはあまり聞かない音が記述されていた。番号 2、クラスター名「落ちる 雨」では、雨が地面や葉っぱに落ちる時に発生する音についての複数の記述があった。少数の記述では、「涙が落ちる音」という人間の喜怒哀楽の感情に連動した音が見られた。番号 3、「ドア 開く」では、様々な材質のドアを開ける時に発生する音について複数の記述があった。少数の記述では、「眼鏡を開く音」という、音に意識を向けていないと記憶に残りにくい音も見られた。番号 4、クラスター名「開ける 閉める」では、ドア、缶、傘を開ける時の音について複数の記述があった。少数の記述では「イヤホンのふたを閉める音」があり、AirPods などのオーディオに必要な部品（イヤホン）に関連する音が見られた。番号 5、クラスター名「風 揺れる」では、季節や外気温が伝わる「冷たい風の音」、風の影響で木が揺れる音について複数の記述があった。少数の記述では、「カーテンがサラサラッと風で揺れる音」が見られた。番号 6、クラスター名「机」では、机に物を置く音や机を叩く音について複数の記述があった。少数の記述では、「机に置いている照明をつける音」が見られた。番号 7、クラスター名「声」では、友達が笑う声や子供たちの声などの人の声に関する複数の記述があった。少数の記述では、「アナウンサーの声」が見られた。番号 8、クラス

ター名「皿」では、皿、スプーンがぶつかる音について複数の記述があった。少数の記述では「お皿が割れたパリンという音」が見られた。番号9、クラスター名「水」では、水が沸騰する音、水を飲み込む音について複数の記述があった。少数記述では「傘の水をはじく音」という記述が見ら

表1 音日記シートに記載された全ての音の記述をクラスター分析したもの

番号	クラスター名	複数記述の例1)	複数記述の例2)	少数記述
1	打つ キーボード パソコン	パソコンでキーボードを打つ音	パソコンを打っている時のパコッという音	トンカチでベグを打つ音
2	落ちる 雨	雨が地面に落ちる音	雨が葉っぱに落ちる音	涙が落ちる音
3	ドア 開く	ドアを開ける音	自動ドアが開く音	眼鏡を開く音
4	開ける 閉める	缶を開けた時のプシュッという音	車のドアを閉める音	イヤホンのふたを閉める音
5	風 揺れる	冷たい風の音	風で木がカサカサと揺れる音	カーテンがサラサラッと風で揺れる音
6	机	机に置く音	机を叩く音	机に置いてある照明をつける音
7	声	友達が笑う声	子ども達の声	アナウンサーの声
8	皿	お皿同士がぶつかる音	スプーンがお皿に当たる音	お皿が割れたパリンという音
9	水	水が沸騰する音	水を飲み込む音	傘の水をはじく音
10	書く	チョークで書く音コツコツ	文字を書く音	紙に文字を書く時のシャープペンシルの音
11	歩く	人が歩く	家族が歩く音	犬が歩く音カチャカチャ
12	切る	包丁で野菜を切る音	いちごを切るときに聞こえたジョキッという音	トランプを切る音
13	鳴き声	犬の鳴き声グルルワンツ	猫の鳴き	トンビの鳴き声
14	擦れる	寝返りで布団が擦れる音	布団から出る時の毛布が擦れる	愛犬の足の爪と石畳の擦れる
15	エンジン 車	エンジン音	車のエンジン音	
16	階段	階段を上る音	階段を駆け上がる音	階段を下りる音
17	足音 走る 外	廊下の人の足音	車が走る音	外で誰かがタンタンッと走っている足音

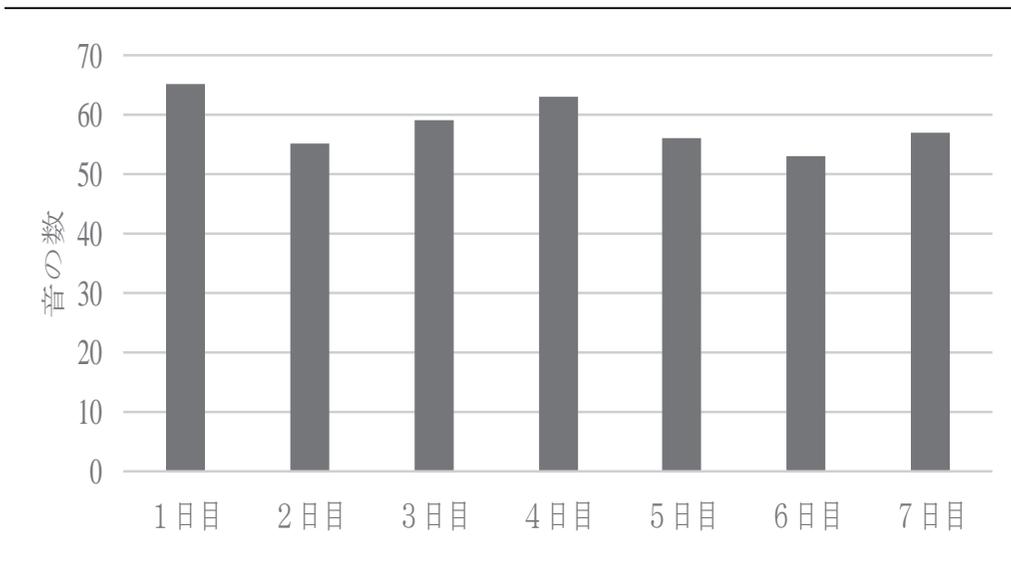
れた。番号10、クラスター名「書く」では、「チョークで書く音」、「文字を書く音」について複数の記述があった。少数記述では「紙に文字を書く時のシャープペンシルの音」という記述が見られた。番号11、クラスター名「歩く」では、人間が歩く時に発生する音について複数の記述があった。少数記述では「犬が歩く音カチャカチャ」という記述が見られた。番号12、クラスター名「切る」では、料理をする時に発生する音について複数の記述があった。少数記述では、「トランプを切る音」という記述が見られた。番号13、クラスター名「鳴き声」では、犬、猫のペットに関する鳴き声について複数の記述があった。少数記述では、「トンビの鳴き声」という記述が見られた。番号14、クラスター名「擦れる」では、布団や毛布などの寝具から発生する音について複数の記述があった。少数記述では、「愛犬の足の爪と石畳の擦れる音」という記述が見られた。番号15、クラスター名「エンジン 車」では、車が走っている音、発進時や走行中に生じるエンジン音について複数の記述があった。自動車通学、公共交通機関の利用などの学生の移動手段を考慮すると日常でよく耳にする音に車関連の音が挙げられやすいと考えられる。番号16、クラスター名「階段」では、「階段を上る音」について複数の記述があった。少数記述では、同じ階段に関する音の「階段を下りる音」という記述が見られた。番号17、クラスター名「足音 走る 外」では、廊下

の人の足の音や車が走る音について複数の記述があった。その一方で、少数記述ではオノマトペを併用してリズム感が伝わる「タンタンっと走る音」という記述が見られた。

2) 日ごとに見る音の数

表2は、調査協力者が記述した日ごとの音の数を捉えている。日によって音の数に差があるのかを検証するために項目を設けた。調査協力者が「〇〇の音」と記述したものを1音ずつカウントすると、全体で408音であった。日ごとの音については、1日目65音、2日目55音、3日目59音、4日目63音、5日目56音、6日目53音、7日目57音である。7日間平均は58.29、標準偏差は4.03という結果となった。調査協力者1人あたりの1日の音の記述数は平均2.91であり、大きな偏りはなく、毎日平均して約3つの音が記述されていた。

表2 日ごとの音の数の推移



3) 自由記述の抽出語

自由記述のデータの前処理では、総抽出語数(使用):1,504(584)、異なり語数(使用):306(208)、使用しない語は「思う」とした。Excel出力機能を利用して、Optionsの抽出語リスト形式から頻出150語を選択し、上位30語までの結果を以下の表3に示した。まず、自由記述の中でどの語がどの程度出現しているかを客観的に把握するためにリスト化した。品詞/活用についてはKHCoderのソフトで用いられている用語を使用している。出現回数は、「音」98回、「聞く」30回、「意識」17回、「気づく」11回、「自分」10回、「感じる」9回、「たくさん」7回、「耳」7回、「生活」7回、「聞こえる」7回、「今」6回、「日記」6回、「普段」6回、「言う」4回、「今回」4回、「周り」4回、「当たり前」4回、「日常」4回、「入る」4回、「面白い」4回、「溢れる」3回、「何気ない」3回、「気」3回、「傾ける」3回、「振り返る」3回、「身の回り」3回、「困む」2回、「違う」2

回、「開ける」2回、「関心」2回であった。

表3 抽出語上位30

順位	抽出語	品詞/活用	出現回数
1	音	名詞C	98
2	聞く	動詞	30
3	意識	サ変名詞	17
4	気づく	動詞	11
5	自分	名詞	10
6	感じる	動詞	9
7	たくさん	副詞可能	7
8	耳	名詞C	7
9	生活	サ変名詞	7
10	聞こえる	動詞	7
11	今	副詞可能	6
12	日記	名詞	6
13	普段	副詞可能	6
14	言う	動詞	4
15	今回	副詞可能	4
16	周り	名詞	4
17	当たり前	形容動詞	4
18	日常	名詞	4
19	入る	動詞	4
20	面白い	形容詞	4
21	溢れる	動詞	3
22	何気ない	形容詞	3
23	気	名詞C	3
24	傾ける	動詞	3
25	振り返る	動詞	3
26	身の回り	名詞	3
27	困む	動詞	2
28	違う	動詞	2
29	開ける	動詞	2
30	関心	名詞	2

4) 自由記述の語に関する共起ネットワーク

表3の結果を受け、それぞれの語が他の語とどのような結びつきがあるのかを明らかにするために、図1を作成した。図1は、集計単位と抽出語の選択より、最小出現数2、最小文書数1、共起する共起関係の選択を Jaccard、上位 60 語、バブルプロットを選択し、調整コマンドからサブグラフ検出 (random walks)、最小スパニング・ツリーを強調にして出現パターンの似通った語の共起度が強いものを線で結んだ共起ネットワークで示した。語の出現数が多いものほど円が大きくなり、語と語の結びつきが強いほど、円同士の距離が近く表示されている。

Subgraph:01 「音、聞く、意識、気づく、生活」

「音」、「聞く」、「意識」、「気づく」の語の結びつきが強く表れており、「音」という語を中心に「聞く」、「意識」、「気づく」が強く結びついているという特徴が表れていた。日常的に音を意識して聞く経験がほとんどないため、意識すると気づく音や聞こえる音があることに感動している記述が見られた。

Subgraph:02 「開ける、良い、普段、必要、今回、たくさん、日記」

「普段」の語に「日記」、「必要」、「良い」、「今回」、

「たくさん」の語が繋がっていた。今回、音日記をつけることで意識して音を良く聞き、たくさんの音が身の回りに溢れていることに気づいた、とする記述が見られた。

Subgraph:03 「好き、作る、人間、世界、発見、目」

新たな音を発見したことへの純粋な感動やたくさんの音が世界を作り、そこに人間が生活している、とする記述が見られた。

Subgraph:04 「今、耳、関心、傾ける、身の回り」

身の回りの音に耳を傾けると微細な音に気づき、音そのものに興味が湧いた、とする記述が見られた。

Subgraph:05 「感じる、多く、社会、発展、聴く、前」

Subgraph:10 「振り返る, 思い出す, 記憶」

音日記を振り返ると、印象に残っていた音の記憶から一日の行動を思い出したり、逆に一日の行動の記憶から音が思い出されたりした、とする記述が見られた。

Subgraph:11 「気, 言う」

何か変わった音がすると、気になってその音の近くまで行ってみたり、音の方向に目を向けたりする自分がいた、とする記述が見られた。

Subgraph:12 「日常, 当たり前」

日常にある、ドアを開ける音や、自身に関する音などは当たり前になっている、とする記述が見られた。

5) 自由記述の高出現語に関する記述

「音」、「聞く」、「意識」、「気づく」の語は、先述した表3にある抽出語上位30の中の上位1~4にあたる高出現回数語であり、尚且つ「音」という語に「聞く」、「意識」、「気づく」が強く結びついている特徴が確認できた。そのため、今回は、「音」と「聞く」、「音」と「意識」、「音」と「気づく」に関するそれぞれの文章を表4にまとめ調査協力者がどのように身の回りの音を捉えているのかを知る手がかりとした。

記述の確認は、KWIC コンコーダンスの Search Entry で抽出語に「音」、「聞く」、「意識」、「気づく」と入力し、標準設定されている前後24語を表示し、文章が前後24語で完結していない場合は、文章全体を確認しながら重複しないように配慮し表4にまとめた。

「音」と「聞く」を中心にした記述では、意識せずに聞いていた音に着目することで、身の回りには音で溢れていることに気づいたという記述、音がある世界の素晴らしさを再認識したという記述、雨の音にリズムがあることに気づいたという記述などが見られた。その他にも「虫の声」を聞く機会が減っているという、言わば「自然音」に接触する機会の減少に関する記載も見られた。また、「イヤホンで音楽ばかり聞いていたが、それ無しでも色々な音があって楽しいと思った」という記述からは、電子音で作られた「音楽」だけではなく、自然や生活の中にある様々な「音」に着目することが新鮮で楽しいという意見が述べられていた。

「音」と「意識」を中心にした記述では、「普段音がありすぎて全然意識していなかったが、意識して聞くと、色んな音がありふれていて、たくさんの音に囲まれているということがわかった」という記述があり、音そのものを漠然と捉えて生活している現状や、意識的に音を聞くことで音の種類などにも気づいていたことなどが確認できる。「季節ごとに聞こえてくる音もあると思うから、

表4 「音」と「聞く」「音」と「意識」「音」と「気づく」に関する記述

「音」と「聞く」
<ul style="list-style-type: none"> ・何気なく聞いている音の中に、生活に必要な音がたくさんあった。 ・何気なく聞いていた音に着目することで、音があることが素敵な事だと感じた。 ・何気なく聞いている音を振り返ることは、当たり前を振り返っていると感じ、そこから幸せな気分になった。 ・イヤホンで音楽ばかり聞いていたが、それ無しでも色々な音があって楽しいと思った。 ・雨の音も聞き方によってはたのしい、弾むような音にも聞こえた。 ・音の中には毎日聞く音もあれば、出かける場所の違いによって耳にする音が違っていた。 ・虫の鳴き声1つ聞くことがなかったので、やはりそういう音を聞く機会は確実に減っているのだと思う。
「音」と「意識」
<ul style="list-style-type: none"> ・いつも聞くドアを開ける音なども意識しないともう当たり前になってきていた。 ・今回は冬におこなったが、季節ごとに聞こえてくる音もあると思うから、そこも意識して聞くとまた違った普段は聞き落としている音もありそうだなと思った。 ・音日記をつける経験をして、普段意識しない音を聞くことができた。 ・普段は周りの音に対して全く意識してないので、聞こえてないと言ってもいいぐらいだった。 ・今まで気にしていなかった音に注目しようと言う意識が生まれた。 ・寝る前に目を瞑って音を聞くことを意識した時に自分の周りや外の音などたくさんの音が聞こえてきた。 ・意識して聞いてみることで、こんな音もあったなど新たに発見することができた。 ・意識して聞いてみると「これ何の音だ？」と気になる音を発見し、予想しながら答えを探すというクイズみたいでおもしろく感じた。 ・猫よけの音やアラームの音ばかり耳に入ってきたが、意識して聞いてみると、服の擦れる音や、パソコンを打つ音、風の音など、聞こえてきた。 ・普段音がありすぎて全然意識していなかったが、意識して聞くと、色んな音がありふれていて、たくさんの音に囲まれているということがわかった。 ・自分がどれだけ音を意識して聞いてないのかということを知ることが出来た。 ・一日の終わりに音日記をつけることで身の回りの音を意識して聞くようになった。 ・今まで無意識に聞いていた音でも意識して聞くことで音に関心をもつことができる。
「音」と「気づく」
<ul style="list-style-type: none"> ・実際は音で溢れていることに気づいた。 ・自分の日常生活の中で音がたくさん溢れているということに気づくことができた。 ・回りにはいろんな音がたくさんあるんだなと気づいた。 ・普段気づかない音に気づく良い機会となった。 ・今まで気づかなかった音やこんな音が鳴っていたんだという気づきが生まれた。 ・生活している上で、音について意識的に耳を傾けてみる面白さに気づいた。 ・自分が耳にする音の中にも好きな音や苦手な音があることに気づき、好きな音が多い活動が自分にとっての趣味になっていることが分かった。 ・音日記をし始めてから音に敏感になり、小さい音でも聞くようにしてみたところ、一日に様々な音を聞いているということに気づくことができた。 ・今の日常生活の中では草木等自然の音をあまり聞くことがないのだと気づいた。

そこも意識して聞くとまた違った普段は聞き落としている音もありそうだなと思った」という記述からは、季節ごとに音があるのではないかと、という仮説を立て、音を探してみようとする肯定的な意見が見られた。「身の回りの音に耳を傾けてみると様々な音が周りから聞こえてきた、猫よけの音やアラームの音ばかり耳に入ってきたが、意識して聞いてみると、服の擦れる音や、パソコンを打つ音、風の音など、聞こえてきた」という記述からは、大きな音は意識しなくても記憶に残るが、自然音や生活音は意識しないと聞こえないという「意識を向けて音を聞く」ことの大切さに気づいている様子を捉えることができた。音日記をつけることで今まで気づかなかった音に気づき、音への興味・関心が高まったとする内容の記述が散見された。

「音」と「気づく」を中心とした記述では、「自分の日常生活の中で音がたくさん溢れているということに気づくことができた」、「回りにはいろんな音がたくさんあるんだなと気づいた」という記述があり、身の回りの音が予想外に多く存在しているという現実を受け止めていた。また、「生活している上で、音について意識的に耳を傾けてみる面白さに気づいた」、「音日記をし始めてから音に敏感になり、小さい音でも聞くようにしてみたところ、一日の中で様々な音を聞いているということに気づくことができた」という記述があり、音日記の実践から身の回りの音へ意識が向くようになったという実践への肯定的な意見が挙げられていた。その他、少数意見ではあるが、「今の日常生活の中では草木等自然の音をあまり聞くことがないのだと気づいた」という記述があり、自然音を聞く機会の減少について述べているものも確認できる。

4. 総合考察

本研究は、幼児教育や初等教育に携わる者を養成する大学では音楽技術を身に付けることに意識が向きがちで、「音を聞く」ことに焦点が当たっているとは言い難いという問題意識を起点に、シェフアーが提唱するサウンド・エデュケーションの教育アプローチを参考に、大学生を対象とした音日記の実践とその後の自由記述の分析を行った。

まず、階層的クラスター分析を行った結果、クラスターは17になり、「パソコンでキーボードを打つ音」、「冷たい風の音」、「子供達の声」、「人が歩く音」、「エンジン音」など、大学生の日常生活の中にある様々な音の全体的な傾向が明らかになった。先行研究のデータは、コロナ禍以前のものばかりで時期や対象も異なるため単純比較はできないが、合唱、カラオケ、ダンスなどで声や音を出すこと、集団行動を伴う音などについてはあまり見られなかった。

音の数については、全408音あり、7日間平均が58.29、標準偏差が4.03、調査協力者1人あたりの1日の音の記載数は平均2.91音という結果を得た。このことから、毎日記載数に大きな偏りは見られず、平均して約3つの音が記載されていた。

音日記の実践後に行った自由記述の分析では、記述に含まれる語の出現状況を客観的に把握したところ、上位に、「音」98回、「聞く」30回、「意識」17回、「気づく」11回が表れていた。更に語と語がどのように結びついているのかを出現パターンの似通った共起の程度が強い語を線で結んだ共起ネットワークで示したところ、「音」、「聞く」、「意識」、「気づく」の語は、「音」という語

を中心にそれぞれが強く結びついていた。

「音」と「聞く」、「音」と「意識」、「音」と「気づく」という文章を表に集約したところ、「意識して音を聞くと普段聞こえていない音に気づく」に類する記述が多く見られ、普段から音を意識して聞いておらず「聞いているつもり」の者が多くいると捉えられた。意識して音を聞いていない、という点においては、先行研究にも取り上げた吉永（2009）の指摘と合致している。音日記に関する先行研究の中でも KH Coder などの分析により客観的なデータを基に解釈したものはあまり見られないため、一定の基準によるデータの報告という意味では本調査の意味はあると考える。

自由記述の分析では、音日記の実践そのものに関しては、「音日記をつける経験をして、普段意識しない音を聞くことができた」、「一日の終わりに音日記をつけることで身の回りの音を意識して聞くようになった」などの肯定的な意見が多く確認できた。音日記の実践により大学生の音に対する意識が高くなるという結果が表れており、吉永（2012）の知見を指示する結果となった¹³⁾。

また、自由記述のその他の内容としては「何気なく聞いていた音に着目することで、音があることが素敵な事だと感じた」、「見るだけでなく、音を感じることで、想像力もふくらむ」、「何気なく聞いている音を振り返ることは、当たり前を振り返っていると感じた、そこから幸せな気分になった」などの音との関わり方や音そのものについて肯定的・内省的に捉えた記述も見られた。この結果は、音日記の実践が、将来的に保育者や教育者を目指す大学生にとって、音への感受性を高める良い耳を育て、聞き方を学ぶという点において有効なものであったと捉えることができる。大学生の「音への感受性を高める良い耳を育て、聞き方を学ぶ」ことが、ひいては幼稚園教育要領（2017）、表現 3 内容の取扱い（1）に示されている「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること、その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気づくようにすること」¹⁴⁾ という指導内容に役立つからである。大学生自身が音への感受性を高める良い耳を育て、聞き方を学ぶことが、将来的に子どもを支援/指導する場面で質の高い保育、教育が行われるために非常に有用なのである。

今回の結果から、大学生はこれから子供と「生活の音」、「身の回りの音」を共感しあったり、一緒に聞いた音を言語化したりすることが想定される。そのためには、保育者・教育者の言葉かけが必要であり、語彙がまだ少ない子供の心情や意図を汲み取り、様々な音の美しさや不思議さを子供たちに気づかせる方向に導く必要がある。大学生が、将来、幼児教育・小学校教育などの中で生活の中の音、身の回りの音を題材に子供を保育・教育するためには、まず、彼ら自身が日頃の生活の中にある音に意識を向け、音を「聞く」体験を深めておくことが求められる。

今後の課題として、今回は音日記をつけてもらう実践であったが、この他にも音の聞き方や捉え方を調査するために、サウンドウォークの実践などを取り入れた調査を考えている。戸外に出て実際に身の回りの音を体験するサウンドウォークにより聴力を育成する方法などの先行研究（鳥越, 2008）¹⁵⁾ などを手掛かりに、今後も様々な角度から大学生の音の聞き方、捉え方について調査し

ていく。

注釈

(注1) レーモンド・マリー・シェーファー (Raymond Murray Schafer, 1933-2021) は、カナダを代表する現代音楽の作曲家、サウンドスケープの提唱者、ブリティッシュ・コロンビアのサイモン・フレーザー大学において教鞭をとった学者である。

(注2) このサウンドスケープとは、既存の言葉であるランドスケープ (Landscape=風景) のランド (Land) をサウンド (Sound) に置き換え「Soundscape=音風景」としたシェーファーの造語である。

(注3) 音日記は、『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション』(1996) の著書の中に100個の課題がある内の14~17番に「音の日記をつける」の項目で取り上げられている。

参考文献

- 1) 吉永早苗 (2009) 「子供の音環境に関する研究 (Ⅲ) —『サウンドスケープ』思想の知見から—」 ノートルダム清心女子大学紀要第33巻, p. 94.
- 2) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説, p. 234.
- 3) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説【音楽編】, p. 1.
- 4) レーモンド・マリー・シェーファー著; 高橋悠治; 訳 (1980) 『教室の扉』全音楽譜出版社, pp. 1-83.
- 5) レーモンド・マリー・シェーファー著; 鳥越けい子, 若尾裕, 今田匡彦; 訳 (1992) 『サウンド・エデュケーション』春秋社, pp. 1-168.
- 6) レーモンド・マリー・シェーファー, 今田匡彦 (1996) 『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション』春秋社, pp. 1-163.
- 7) 吉永早苗 (2012) 「大学生による『一週間の音日記』—保育・小学校教諭を目指す学生の『聞くこと』に対する意識を高める試み—」『音楽学習研究』第8巻, pp. 23-34.
- 8) 岡本拓子・吉永早苗 (2014) 『『聞く』ことから始まる音への気づき—教員や保育者を目指す大学における『音日記』の実践—』高崎健康福祉大学紀要第13号, pp. 99-112.
- 9) 二宮貴之 (2018) 「幼児教育課程における音楽の指導法に関する研究—サウンド・エデュケーションに着目して—」国際幼児教育研究第25巻, pp. 131-140.
- 10) 土田義郎 (2008) 「小学校の総合学習におけるサウンド・エデュケーション事例」日本サウンドスケープ協会誌第10巻, pp. 182-185.
- 11) 小枝洋平 (2016) 「知的障害を有する生徒とのサウンド・エデュケーションの実践」音楽教育実践ジャーナル第14巻, pp. 15-23.
- 12) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版, p. 15.
- 13) 吉永早苗 (2012) 「大学生による『一週間の音日記』—保育・小学校教諭を目指す学生の『聞くこと』に対する意識を高める試み—」『音楽学習研究』第8巻, p. 30.

- 14) 文部科学省（2017）幼稚園教育要領， pp. 17-18.
- 15) 鳥越けい子（2008）「生涯学習におけるサウンド・エデュケーション事例『都市の音探検：渋谷サウンドウォーク』」日本サウンドスケープ協会誌第 10 巻， pp. 26-30.